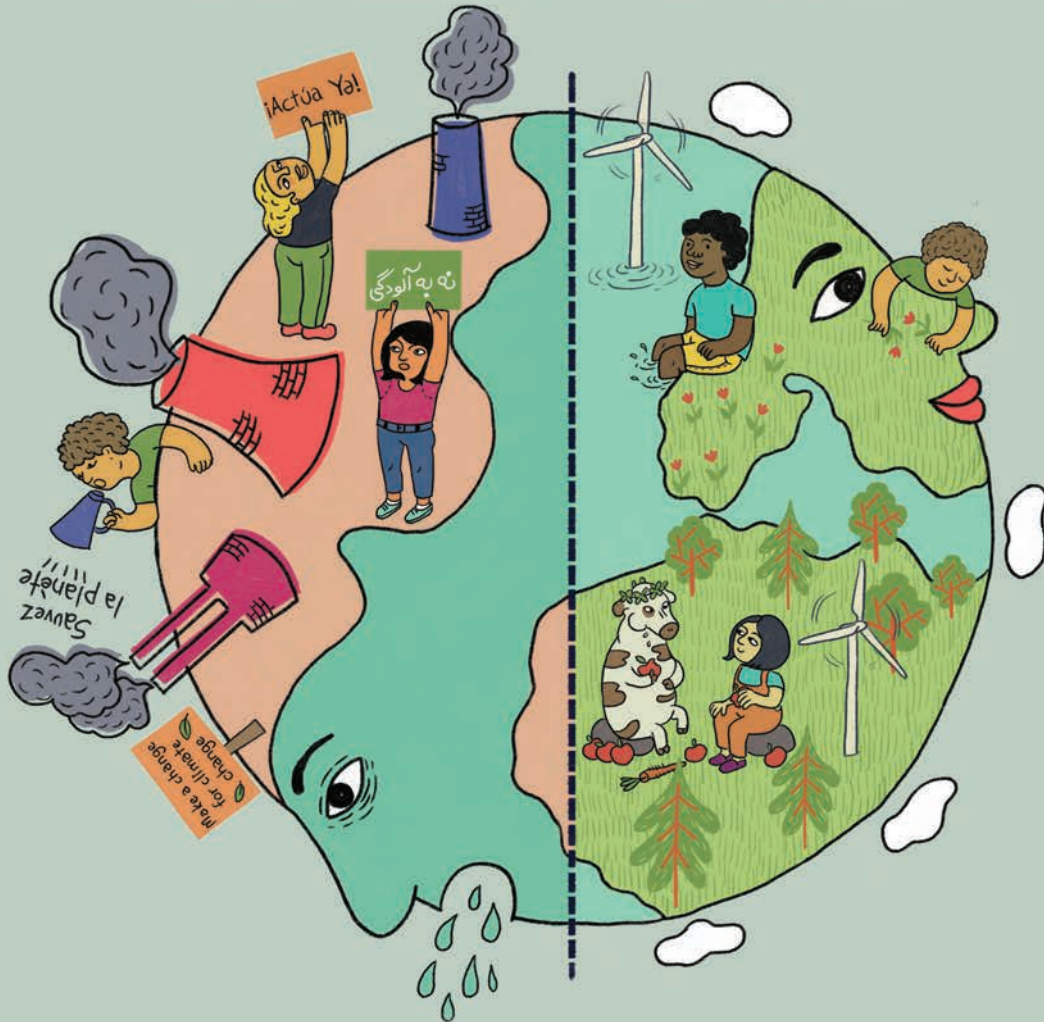


風よ吹け



マルゴシャ・バルトシク
フィリッパ・ナトル・ジョーンズ
ザム・ザデ



2019年は、子どもたちが大人に対して、気候変動をくいとめるように抗議行動を起こした変革の年とされるでしょう。

この絵本は、2人の母親（風力エネルギーを推進するポーランド人と、イギリス人ジャーナリスト）、そして才能ある若いイラン人アーティストの会話をもとに生まれ、再生可能エネルギー、たとえば風の力がどのようにして世界中の人を清潔で健康的な生活をおくることができるようにするのかを説明しています。



2019年、世界中で子どもたちが声を上げました。
先生がきらいだったわけではありません。大人に
対して「気候変動（きこうへんどう）をとめる
ために行動してほしい」と言いたかったのです。
そして、きれいな地球を守るための法律をつくる
べきだと要求しました。



でも、「気候変動」ってなんなのでしょう？
どうして、「気候変動」をとめないといけないのでしょうか？
それを知るためには、歴史をさかのぼってみなければなりません。
200年前、ほとんどの人は田んぼや畑のそばに住んでいました。



その後、「産業革命（さんぎょうかくめい）」が起こります。
工場がどんどんできて、
人びとは町で働くために
引っこしていきました。

そして、工場でものをつくったり、
家で電気を使ったり、車や飛行機を
動かしたりするために、
ものすごい量のエネルギーが
必要になりました。

手でものをつくるかわりに、機械でものをつくると…
たくさんの人の力が必要になります。



そうすると、みんながもっとお金をかせげるようになり、
もっとたくさんの食べものが買えるようになります。それまでより健康的な生活を
送って、長生きできるようになるのです。



飛行機や車によって、かんたんに遠くまで行ける
ようにもなります。



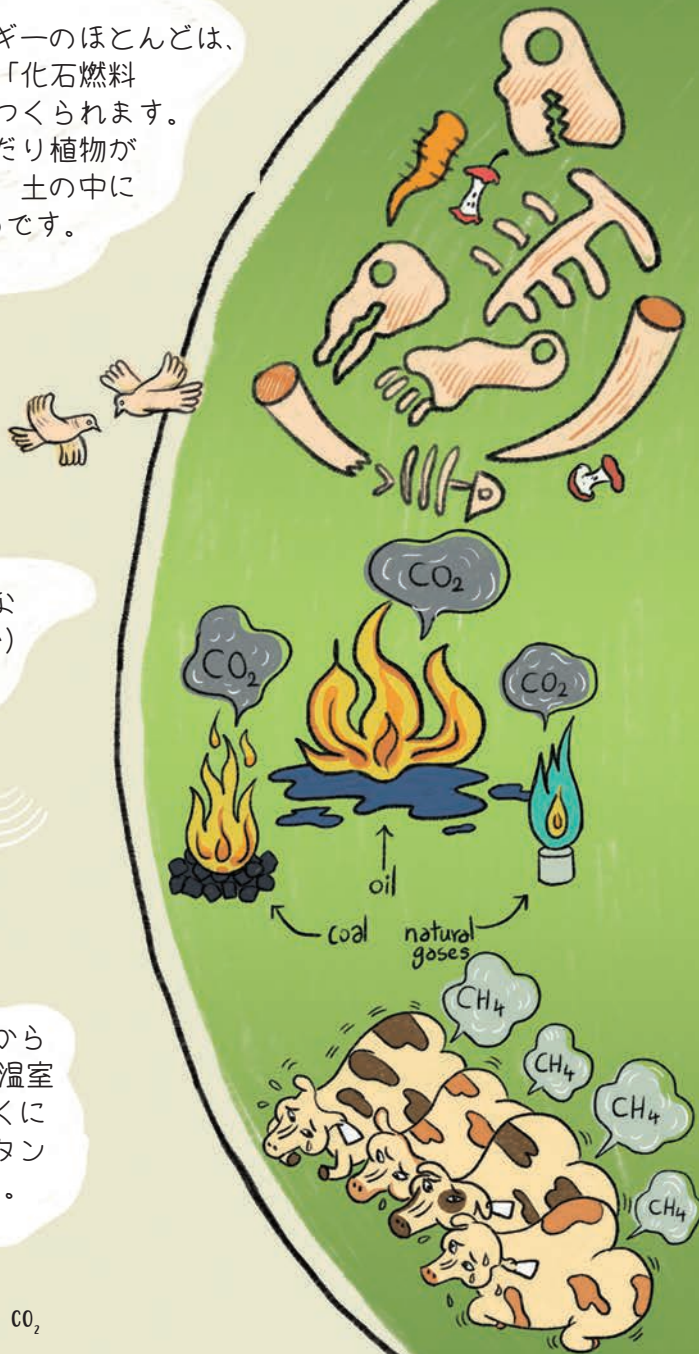
でも、そのときに使われる必要なエネルギーのほとんどは、石油や石炭や天然ガスのような「化石燃料（かせきねんりょう）」をもやしてつくられます。「化石燃料」とは、動物が死んだり植物がかわれたりしてこなごなになって、土の中に何億年もうもれてできたものです。

「化石燃料」をもやすと、「二酸化炭素（*）」のような「温室効果（おんしつこうか）ガス」が発生します。

牛や動物がたくさんいる農場からも、「メタン（*）」という「温室効果ガス」が出るのです。とくに牛のおならやげっぷには、メタンがたくさんふくまれています。

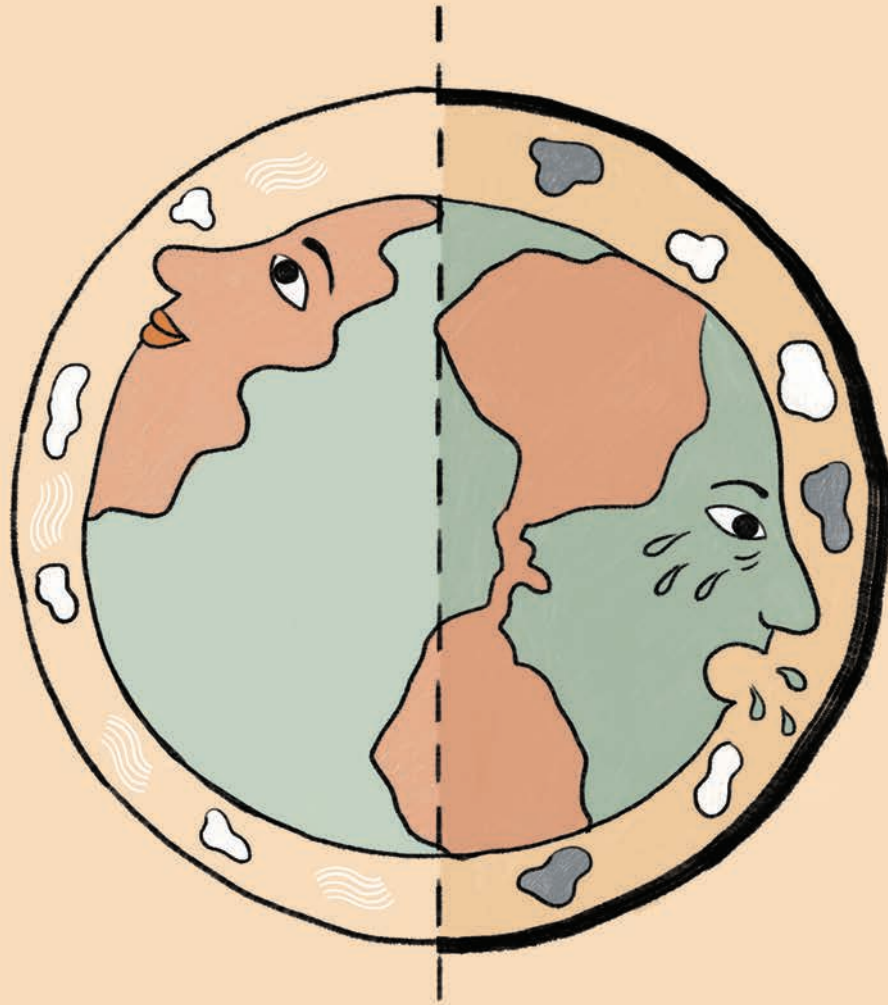
* 二酸化炭素（にさんかたんそ） CO_2

* メタン CH_4



これらのガスは、見えない毛布のように地球をぐるぐるまきにします。
そして、太陽の熱をにげないようにすることで、
温室みたいに地球をあたためます。

この毛布はふつうなら、地球を住みやすい場所してくれます。
ところが、毛布がぶあつくなりすぎてしまって、地球は熱くなり、
「気候変動」が起きます。



人間が工場をつくりはじめたときとくらべると、
地球の平均気温はもう1℃高くなっています。

「1℃ぐらいだいじょうぶ」と思うかもしれませんが。
でも、あなたがちょっとだけ熱を出したときに、
どんな感じだったか思い出してみてください。
地球もそれと同じです。



洪水や熱波のような異常気象が、いまやどんどんあたりまえになってきています。
動物や植物は、環境が変わったり、いままでいた場所がなくなったりすることで、
生きていけなくなって、絶滅（ぜつめつ）したりしています。



そして人間も、工場や車から出る汚れた空気のせいで、病気になったり、
死んでしまったりするのです。



でも、私たちにできることがあります。



電灯のスイッチを切って、エネルギーを節約すれば、二酸化炭素が出る量を少なくできます。



歩いたり、自転車に乗ったり、バスや電車で出かけたければ、車や飛行機に乗るより空気をよごさないですみます。



お肉を食べる量を少なくすれば、メタンをへらすこともできます。



でも、それだけでは足りません。
「化石燃料」をもやしてエネルギーにしていることこそが、
温室効果ガスのいちばんの原因なのです。

わたしたちは、できるだけ早く、
「化石燃料」のかわりに、太陽や風のような、
地球にやさしいエネルギーを使うように
変えていかなければなりません。



人間は、大昔から風の力を使ってきました。おそらく最初に風を使ったのは、船に帆をはり、風をうけて海や湖をわたったときでしょう。



いまから2000年ほど前には、風で水をくみあげたり、麦をひいたりするために、風車がつくられました。



そして19世紀の終わりには、デンマークの気象学者ポール・ラ・クールをはじめとする科学者たちが、電気をつくりだすために風力発電機（ふうりょくはつでんき）を発明しました。

1918年にはすでに、デンマークに120以上の風力発電機がありました。現在の風力発電機のような3枚の羽根をもつ風力発電機は、1978年になってようやくデンマークのエンジニアによってつくられられました。



風力発電機によって何ができるのでしょうか？

1. 風が羽根を回します

2. モーターを回転させます

3. 電気をつくりだします

4. 温室効果ガスを
出さずに、
家や学校や工場に電力を送ります

5. エンジニア、工事現場で働く人、建築家、
科学者などのためにさまざまな仕事を生みだします。



初めての風力発電機は、
19世紀の風車とくらべても、
それほど大きく
ありませんでした。

いまの風力発電機は、昔にくらべると、
背が高く、ゆっくり動いて、
じょうぶで、たくさん電気をつくり
だせるようになりました。

世界でいちばん強力な風力発電機は、
羽根が1回まわるだけで、
あなたの家で使っている1日分の
電気をつくることができます。

2025年までには、
たくさんの風力発電機が、
パリのエッフェル塔より高くなる
でしょう（風力発電機1基の重さは
ゾウ100頭より重いのです！）。



いまでは、13万基以上の風力発電機がヨーロッパの国々に電気を送るために使われています。エネルギーを節約し、空気をきれいにするために、ソーラーパネルや電気自動車を使ったり、わたしたちの行動を変えたりしてみましょう。そこに風のエネルギーが加わることで、わたしたちみんなの未来は、クリーンで健康的なものになるのです。



後援：

Wind[•]
EUROPE

windeurope.org



www.letthewindblow.org



翻訳：Women in Wind

Global Leadership Program

日本代表、上原三千代

(一般社団法人日本風力発電協会 /
Japan Wind Power Association)